平成23年6月号　№ 416

なかま

発　行
佐倉市立中央公民館
編　集
なかま編集委員会
〒285-0025
佐倉市鏑木町198-3
電話 (043)485-1801

2ページ　住み続けたい町に----------　筒井真人　地域で支える子育て----------　小林邦子
3ページ　読書の楽しみ ----------　村井彰夫　おひとりさまの人生----------　茂利晃

私の心の故郷

服部一宏

東日本大震災で幾多の方々が、大切な故郷を失わんとしていることに、心からご同情申し上げます。

そんな中で、こんな故郷の持ち方のある事をお話ししてみようかと思いました。

広辞苑で「ふるさと」を引くと「自分の生まれた土地」「なじみ深い土地」とあります。前者なら「名古屋」、後者の解釈では三十余年住んでいる「佐倉」になります。

しかし、自分の心で、懐かしく思い出される土地は住んだことのない大和の土地です。年を経ると共に、「私の故郷」との思いが大きくなり、今ではすっかり私の故郷に成りきっています。

奈良の思い出は大変古く、五歳のころ父母に連れられ若草山に登った時の情景が浮かんできます。芝生で足をとられるので、両手を母と父にぶら下げられ登ったことや、春日神社の境内で、鹿煎餅を食べてしまって笑われた自分の姿を鮮明に思いだします。

飛鳥、白鳳、天平、貞観と続く時代に作られた青銅、乾漆、塑像、木造の仏様のお姿に何故か、心が強く魅かれ、又、それらの仏像を祭っている同時代に建てられたお寺の素朴で明るく、おおらかなたたずまいが魅力的です。

秋篠寺は、鎌倉時代に建てられたものと聞いていたのが、ある時、そのたたずまいに、ふと好感を覚え、説明をよく読むと、建物は、創建当時の奈良時代の様式を模しているとあります。東京国立博物館の大屋根も感じがいいなと思っていたら、矢張り奈良時代の様式をまねているそうです。

若い頃は、奈良時代の寺院建築と聞いて五条市の栄山寺の八角堂をわざわざ見に行ったり、東京・深大寺に青銅の白鳳仏があるというので、大学四年の茅野旅行の際、名古屋に戻らず、足を延ばして夜行で東京に出て、深大寺へ行ったりしました。この様にして、私なりの鑑賞眼が育ったようです。その時境内で読んだ朝刊の一面記事が、忘れもしない、社会党の浅沼委員長の暗殺事件でした。

図書館や大きな本屋で美術本を手にとって、昔訪ねた奈良時代の仏像や寺院に再会したり、法隆寺南門まで続いていた美しかった長い松並木の参道が消えてしまった事を偲んだり、残念ながら見残している奈良時代の古寺古仏を書物で見つけ出していつの日か訪ねる事を考えたりすることを楽しみの一つにしている今日この頃です。

（編集委員）

住み続けたい町に

初夏、家の軒先に大きな紙の目玉がいくつも出現します。そう、ツバメの巣をカラスから守る為の方策。やさしい大家さん。守られた巣からヒナがピーピー鳴き、巣立って行くのを見守ります。

秋、柿の実がなり、「これは甘柿だ」「いや形が渋柿だ」と噂をしながらいつも通りすぎます。

仲間達と楽しく、健康的な町内パトロールをやっています。週４回、１回１時間弱。年代も体力も異なり、リハビリの人もいたり、実力に応じて歩きます。歩きながらの話題は実に豊富。庭を見て花や木を知り、健康維持の意見交換、自治会行事の打ち合せ、市役所への不満等々。たばこのすいがら、ゴミを拾って歩きます。一人暮らしの方で、見守り要請があれば郵便受をのぞき、たまっていれば玄関のブザーを鳴らしてみます。出会った人達には必ず大きな声で挨拶をおくります。必ず返事が返って来ます。住民の方とは一言コミュニケーション。仲間達と手分けすれば町内の方々の名前と顔がほとんどつながります。パトロールの時いただいた琉球朝顔の根がつき、新たに２軒の家で見事な花が咲きました。

庭先に咲くスミレを楽しみにする春。大汗をかきながら夕食のビールを楽しみにパトロールする夏。充実の秋。そして春を楽しみに耐える冬。

私達の町では、きずなを少しずつ深め、住みやすくする地道な努力が続いています。「住み続けたい町」その為のささやかなこころざしが、一人一人にとっても生きがいとなり、目標となり、穏やかな人生を過ごす糧を与えてくれるのだと信じています。

（ユーカリが丘　筒井真人）

地域で支える子育て

近年、核家族化が進むなか、地域における人と人との繋がりも薄れ、子育てする母親が、地域の中で孤立する傾向にあります。

私達は地域の中で孤立せず、安心して子育てができることを願って、育児に関心ある地域の人達と共に、育児サポートのボランティア活動をしました。

育児に悩んだ時、急に手助けが必要になった時、すぐそばにサポートする人が存在してくれる。このことが母親に精神的な安定をもたらし、その母親の精神状態がそのまま子どもの心の成長に影響していくことを、私達はボランティア活動を通して知ることができました。

昨今、社会問題になっている児童虐待についても、子育てする親が地域の中で孤立することが、大きな原因の一つになっていると思われます。虐待されている子どもを救い出すことは、第一の目的として考えていかなければいけませんが、苦しみながら虐待を続けている親自身をも救う手立てを考えていかなければ、虐待の連鎖は止まらないと思います。

報道の記事を読むたびに、誰か一人でも親身に話を聞いてくれる方がいたら、子どもを死に追いやるような、重大な罪を犯すようなことはなかったのではないのかと、心を痛めます。

しかし、親も声をかけてくれるのを待つだけではなく、勇気を持って自分から声を発してほしいと思います。声を発すれば、必ず手を差し伸べてくれる方がいます。

地域の人達と、子育て中の親子とが声を掛け合うことで、安心して子育てのできる町になるのではないでしょうか。

（裏新町　小林邦子）

読書の楽しみ

私は古希を迎えていますが、この年齢は平均寿命が83歳まで伸びている現在、まれでも珍しくもなくなりました。では若いのかと問われますと、そうだとは言い切れません。これから一旗揚げて、大金持になる時間的余裕はなさそうですから…。ただ、経済的には無理でも、精神生活の方でしたら幾らかの余裕がありそうです。その方法とは？読書!! そうです。読書だと思っているのです。

顧みますと、社会人になってからの読書は仕事に関する専門書が中心で、時折、話題のベストセラー物に接するのが精一杯でした。しかも、その接し方たるや、職業人ないし社会人としてのいわば義務感からだったのです。それが今や「楽しくて仕方がない」という心境に変わったのですから驚きです。何しろ、直近の1年間で168冊も読んでいるほどです。この変身ぶりはどうしたことでしょう。

実は、数年前に心臓病を患って地獄の三丁目から生還したとき、残りの人生はおまけだと思えたのでした。そして、貧しい精神生活をちょっぴりでも豊かにするために、そのおまけを使いたいと思ったのです。それには手近なところで読書だと考えたのでした。そこで、『三国志』、『真田太平記』など長編歴史物を手始めに、これまで敬遠していた太宰治などを読みまくりました。

最近、司馬遼太郎の作品群、例えば佐倉順天堂ゆかりの『胡蝶の夢』や我が故郷北海道ゆかりの『菜の花の沖』などを読み、新たにいろいろなことを知っていささか興奮しました。いつかあの世に旅立つとき、果たしていかほど豊かになっていられますことか？

（白銀　村井彰夫）

おひとりさまの人生

亡き家内との思い出に浸りながら、寂しく過ごしていた三回忌の頃に、「これからの人生は亡き奥さんとの思い出の中で過ごすより、自立して楽しく歩んでいって欲しい」とある友人が助言してくれた。そして、当時、話題になった『おひとりさまの老後』などの本に、何れ一人になるのだから、一人の人間として、自立した人生を楽しく過ごしていくことが大切だと書いてある。夫婦が仲良く同じ趣味を持って、老後を過ごすことを理想と考えていたがそれを読み、今までの私の人生を大きく反省させられた。

若い頃は、一生懸命働き、一家の家計を支えてきた男が、定年後は、仕事や生き甲斐を失い、どう過ごしていくか迷う人生を描いた小説を読み、家内を亡くす前から考えておけば良かったことに気が付く。そして、「これからのあなたの人生は、私との思い出の中で過ごすより、楽しい自立した人生を過ごして欲しい」と亡き家内が願っているように思うようになった。

〝すぎもとまさと〟の亡き母の思い出を歌った『吾亦紅（われもこう）』の詩に、「おれ、来月離婚してはじめて自分を生きる」とあり、それを母に威張りたいとあるが、多くの女性はその気持ちは理解できないという。自立した男の人生を歌っている好きな歌詞だ。そして「私も立派に自立して楽しい人生を過ごしているよ」と亡き家内に威張ってやれるように毎日を過ごそうと思う。

最後に、自立への道を助言してくれた友人に感謝してやまない。

（中志津　茂利　晃）

6月の黒板

『なかま』の原稿を募集しています！

『なかま』の２ページと３ページは佐倉市民の皆さんから投稿いただいた記事を掲載しております。

『なかま』の原稿は、自由テーマを原則としています。**「出会いと別れ」、「旅の思い出」、「祭り」、「私のふるさと」、「私の健康法」**など何でも構いません。また、日常での出来事で発見したこと、気付いたこと、経験や感想などもご随意にお書きください。

原稿の字数は、650字（13字×50行）以内です。また、掲載するにあたり常用漢字への変更や、句読点等修正させていただくことがあります。

問い合わせ先

佐倉市立中央公民館　TEL０４３－４８５－１８０１

〒２８５－００２５　佐倉市鏑木町１９８－３

さくら道

未だ寒さが残る春先、桜を植えるボランティア活動で鹿島川に桜の苗木を植えた。

昨年秋国体カヌー競技が行われた会場跡の堤に、長い間の念願叶って、合計８本の桜を植樹することができた。「御車返し（みくるまがえし）」という品種である。

３月11日の東日本大震災で、堤が大きく波打つ被害を受けたにも拘わらず、桜の幼木は幸いにも難を逃れ無事だった。今ではその幼木には新緑の若葉が生えている。

東日本大震災で津波の大被害を受けた宮城県下で、子供たちが災害復興の願いを込めた桜苗木の植樹を行った。将来への希望を託して、20年後の花見を約束したという。

鹿島川に植えた桜もその頃には、淡紅紫色・大輪半八重の花を咲かせて鹿島川河畔に彩りを添えるであろう。

（原田和行）

あとがき

４年前カレッジに入学、はがき１枚書くこともまれな私が順番に文を書かねばならぬことも知らず『なかま』の編集委員となりました。原稿用紙１から２枚の中で文をまとめることの難しさを痛感しながらも、老いゆく脳を少し刺激したかもしれません。

４名の方の作品を拝読し、心の絆を深め支え合う地域にすることの大切さ、又いかに自分らしい老後を過ごすかが、個々人の課題でもありますが、老後の過ごし方の参考になりました。私も『胡蝶の夢』を読んでみようと思います。

東日本大震災から３ヶ月、天災の凄まじさに驚愕し被災地の皆様には心よりお見舞い申し上げます。少しずつ復興の兆しは見えてきているようですが１日でも早い復旧、復興を願う日々です。

（栗田勢子）